

## 入試制度

2024. 1. 28

「生徒は、高校入試に関して初心者です。そう思って対応してください」毎年、11月になると、そんな話をしている。教員は、おおむね3年に一度の割合で経験してきているため、わかっていることが多い。自分が中学3年生だった経験もある。

中学3年生は、高校入試を経験したことがない。だから、わからなくて当たり前なのである。ところが、教員というのは、「このくらいは、わかっているだろう」と思いたがる傾向がある。そこから、生徒と教員との認識のズレが生じる。

高校入試に関して、その制度が変わることがある。私立高校は、毎年のように何かしらは変わってきている。だが、教員は、今までの経験で判断する傾向がある。自分が中学3年生を担当した時の経験にこだわる。

高校入試に限らず、教員には、一度自分の中に入ってきた情報に、いつまでも固執する傾向はないだろうか。情報の上書きが苦手なような気がする。情報の出し入れが、あまり得意ではないように思う。使えなくなった古い情報を捨てて、新しく使える情報を入れるという作業である。こういったところが、授業改善が進まないところにも影響しているように思う。

昔の情報をもったままでもかまわない。だが、判断基準としては、最新の情報を使わなくてはならない。私立高校の入試が、まさしくそうである。

県立高校に関しては、大きな改革があり、数年が経過した。制度として、定着してきている。ちょうど、高校に勤務していたときが、改革1年目と2年目だった。高校にとっては、大きな改革だったため、先生方は、例年以上の緊張感をもって臨んでくれていた。

入試事務に関する文書や資料を見ると、以前の県立高校入試制度の名残が見られる。制度が大きく変わったにもかかわらず、今まで使っていたデータをそのまま使おうという姿勢が垣間見られる。その結果、現在の入試日程などに適応していない部分が出てきている。この、あてはめるというのも教員に見られる傾向である。何とかあてはめて、その場をしのごうとする。ここにも、情報の出し入れを苦手としている一面が見られる。

入試の内容に関してもそうである。面接の位置づけが変わってきている。にもかかわらず、旧態依然とした指導を繰り返している面はないだろうか。推薦入試もそうである。高校によって、推薦の意味合いが違ってきている。ところが、昔ながらの推薦のイメージで考えようとする。

以前だと、この時期が、県立高校のI期選抜だった。今となっては、懐かしい。さすがに、「I期選抜」という言葉を聞くことはなくなってきた。昔のI期選抜で入った生徒と現在の特色選抜で入った生徒の進路というものは、どのような状況になっているのだろうか。入試制度が変わることで、生徒にどのような影響が出るのだろうか。そんなことを考えることがある。